

建築をめぐるいくつかの時間

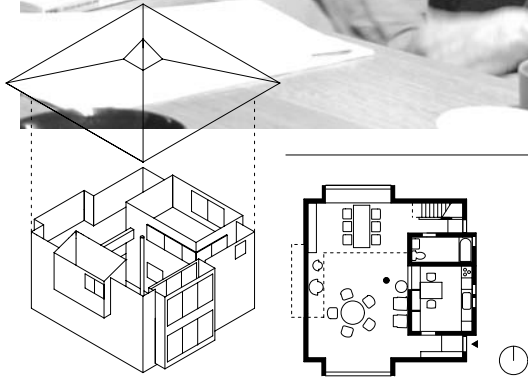
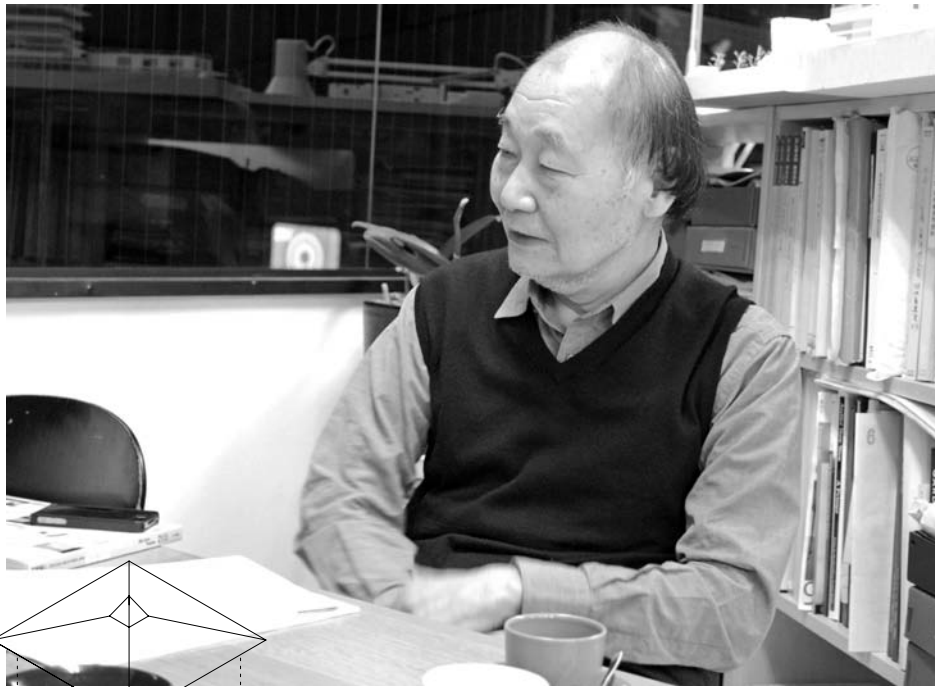
- ①建築の構成による時間
- ②建築が竣工した後の時間
- ③建築の人類学的時間
- ④建築史的時間
- ⑤個人の作品歴における時間
- ⑥過去から連続する
「今、ここ」の時間
- ⑦建築を設計する時間
- ⑧建築と日常の時間

PROFILE

坂本一成（さかもと・かずなり）

1943年東京生まれ。1966年東京工業大学卒業。学部4年から大学院博士課程にかけて篠原一男研究室に在籍（～71年）。その後、武蔵野美術大学および東京工業大学で、大学の研究室を中心に設計・研究活動を展開。House F（1988）で日本建築学会賞作品賞を受賞。本誌ではNo.0（2009）と別冊『多木浩二と建築』（2013）でのロングインタビューなどがある。

インタビュー＆構成＝長島明夫



散田の家、設計＝坂本一成、1969年竣工
正方形を基本とした平面の中心に丸柱が立ち、方形の屋根が架かる。その中心性の強い構成を相対化するよう、吹き抜けの広間に接して、複数の場所が様々に併存している。[関連 p.194-]

複数の場所の併存は、言ってみればその建築に時間性が内在しているということ。複数の場所がある以上、当然そこを移動するには時間がかかる。でも先生の建築の場合、移動によって視点が移り変わっていくようなシーケンスが問題になるのではなく、実際にそれぞれの場所を行き来しなくても、それらの場所の繋がりと隔たりを感じさせる。一つの場所にいながら複数の場所の存在を感覚させて、そのことがその場所の

味が見出せる気がします。もちろん五〇年近い作品歴のなかでも様々な変遷を語られているわけですが「*1」、〈複数の場所の併存〉は一貫しているのではないのでしょうか。デビュー作の《散田の家》（1969）にしても、その後の作品と比べて非常に求心性が強い空間構成でありながら、それでもやはり複数の場所が併存して、関係している。《散田の家》は篠原一男先生（1925-2006）の強い影響下にあった作品だと言われますが、そのなかでもすでに坂本先生的なものが現れている。そこに意味が見出せる気がします。

——『代田の町家』の危機（2013）では、ある部屋で自分が居心地の良さを感じたとしても、単にその部屋だけではない、他の部屋や建築全体との関係のなかでその居心地の良さが成り立っている、と書きました。歴史ということには特に触れていませんでしたが、「今、ここ」ではない離れた場所を想像するという意味では、この特集とも問題意識は繋がっているのだと思います。

もう半年以上前、先生に最初に歴史特集をやらうと思わずと申し上げた時に、いいですねと喜んでくださったのですが、それに加えて、でも歴史よりも時間のほうがテーマにしやさいのではないかとのご意見がありました。そう言われて考えてみると、先生の作品を見る時に、時間というのは一つのキーワードになるのかもしれませんが。建築と時間と一口に言っても様々な視点があるわけですが、そもそもどんな視点があるのか、事前に僕のほうで、仮に八項目ほど挙げてみました「上掲」。今日はこれを辿りながらお話を伺っていきたいと思います。

① 建築の構成による時間

複数の場所の併存

先生の建築に一貫する特徴は、「代田の町家」の危機」でも書いたような、〈複数の場所の併存〉ではないかと思っ

*1 参照＝坂本一成「自由で解放的な、そしてニュートラルな建築の空間」『建築に内在する言葉』TOTO出版、2011、など